五代友厚の婿養子龍作と西郷隆盛の 長男菊次郎が近代化を手がけた金山

五代龍作

第７代鉱業館館長

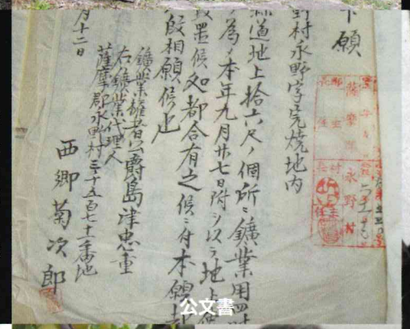
明治37年、金山の大拡張計画に伴い、工学博士で五代友厚の婿養子である五代龍作を初代鉱業館長に任命した。五代は、胡麻目大通洞の切り拡げと掘進、晒及び三番滝両竪坑の開作、水天渕に水力発電所の建設、三番滝（完焼）に電力による製錬所の建設を進め、近代化を図った。

島津（薩摩）藩の名残

今も時吉に残る金山踊り

鉱業館の坂

鉱業館長就任100周年記念



公文書

西郷菊次郎

第8代鉱業館館長

西郷隆盛の長男。台湾宜蘭庁長、京都市長を経て、明治45年（1912年）から大正８年（1919年）まで第8代館長として就任。
鉱業館夜学校を建て金山幹部養成にあたり、その後幾多の人材を輩出した。
文武両道の人材育成に当った氏の功績をたたえ、毎年『西郷菊次郎顕彰剣道大会』を開催しています。

顕彰碑

西郷梅

菊次郎の母愛加奈

西郷菊次郎顕彰剣道大会

菊次郎手植えのもみじ

胡麻目坑	第７代館長五代龍作により計画された大通洞。山ヶ野金山までつながっている。
秋葉神社	金山の大火（大正15年2月11日）、搗鉱所の火災（翌々日13日）を起こし、大きな建物一切が焼失した。手掘り坑跡に秋葉神社を祀り、秋葉講を催し、女子禁制の祭祀を行い、現在に引き継がれている。
第一竪坑	深さ150mの竪坑で、巻上機（エレベーター）により金鉱石を運びだしたり、坑夫が入出していた。近くには菊次郎の夜学校跡がある。
第七坑道	三番滝坑とも呼ばれ、九郎太郎川が穴川に合流する場所にあり、地上の坑口では、一番低く排水坑としての役割もあった。
鉄橋橋脚	胡麻目坑から製錬所まで金鉱石を運ぶ、トロッコ道が九郎太郎川と平八重川を渡るために鉄橋が架けられた。高さ24mの切石積み、大正３年に木橋から鉄橋に架け替えられた。
鉱業館跡	明治41（1908）年6月に上棟された鉱山事務所は、二階建ての洋館で鉱業館と呼ばれていた。上り口は鹿児島から城造りの石工を連れてきて建てられた。
三番滝製錬所跡	明治37（1904）年、金山の電化大改造により建設され、大正15年2月1日火災によって焼失した。鍛冶屋・鋳物工場・木工場・製材所・分析所・変電所・化成工場などが建ち並んでいた。
安養院・年行寺跡	現在の年行寺墓地：開山明厳和尚、寛文元（1661）年寂　元禄元（1688）年琉球僧により水車搗鉱法が伝わる。金山創業記念碑は、明治初め廃仏毀釈で、夢想谷徳源社内に移設された。

西郷菊次郎年表

1861年（万延2年）
1月2日父親：西郷隆盛、母親：愛子（愛加那）の長男として奄美大島龍郷で生まれる
1869年（明治2年）
8歳の時に鹿児島西郷本家に引き取られる
1871年（明治4年）
勉学の為に上京
1872年（明治5年）
農学修行の為アメリカへ留学
1874年（明治7年）
アメリカ留学を終え帰国
1877年（明治10年）
17歳の時に西南の役に従軍し右足に被弾し、膝下から切断の重傷を負う
1880年（明治13年）
1881年（明治14年）まで龍郷に帰郷
1884年（明治17年）
外務省へ
1895年（明治28年）
台湾総督府参事官心得
1896年（明治29年）
台北県支庁長
1897年（明治30年）
台湾宜蘭庁長
1902年（明治35年）
宜蘭庁長を依願免官。
1904年（明治37年）
10月12日京都市長に就任
1911年（明治44年）
7月13日京都市長を退任
1912年（明治45年）
島津家永野金山鉱業館長就任
1919年（大正8年）
12月島津家永野金山鉱業館長退任
1928年（昭和3年）
11月27日鹿児島市武町の自宅で没（享年68歳）

金山物語　永野金山発見絵図

宮之城領主四代目の島津久通は、信仰していた紫尾権現様から「熱心な願いを叶えてやろう、これより東へ５里、「木の根」の付いた呼名の所に尋ねて行くが良い、必ずお前の望んでいる黄金に出合えるだろう」とのお告げがあり、探索にのりだしました。

探索を始めてから数年、穴川を遡る一行！「あったど～！」　穴川伝いの佐志で砂金を発見し、さらに上流へ向かっていきました。

一行は、上流の長野茶屋ケ岡の麓付近で、猪肉を焼いている老爺（狩人）と合って懇談し、「じいさん、この辺に「木の根」のついた地名を知らないか」と尋ねると、爺さんは「この東、半里のところに“木の根越え”と言うところがあります」と答えた。

一行は台々鼻で野宿したその夜、夢の中で権現様の「茶屋ケ岡の屏風岳に登れば、黄金のありかが判るはずじゃ」とのお告げがあり、一行は夜を明かした。後にこの地を「夢想谷」と名付けた。

一行は早朝、紫尾権現様のお告げどおり屏風岩まで登り東側を望んだら、向かいの山に赤牛が寝た姿の岩が光っているのを発見し、湧き上がりまでたどり着いた。そこには山一面に燦燦と輝く花のような「とじ金」が光り輝いていた。

寛永１７年（１６４０年）３月に、「見つけたど～」島津久通、内山与右衛門一行の発見の喜びの歓声が山の谷間に響き渡った。

久通が発見した長野金山は、島津藩の財政立て直しと、薩摩藩が中央で活躍する資金源となった事は言うまでもありません。昭和に入り２８年に閉鎖されましたが、平成に入った今なお、黄金の郷として語り継がれています。